

# 安曇野の原風景を巡る ふるさとウォッチングマップ

No.13

## 穂高新屋・耳塚地区

ー旧有明村の歴史と文化を訪ねるー

有明山が安曇富士と呼ばれるにふさわしい端正な形に見える、新屋・耳塚地区。山と天蚕の歴史を今にとどめる大きな古民家と、緑あふれる小路が魅力のコースです。

秋深まる季節、工芸作家を中心に安曇野の暮らしと文化を楽しむ「安曇野スタイル」の中心的なエリアです。

点在する道標や石造群をみつけながら、芸術の秋を感じることできる地区です。



編集・発行

安曇野ふるさとづくり応援団

URL <http://azumino-furusato.com>

※本マップは公式サイトからダウンロード可能です

◆コースタイム ※時間は歩速3km/時としての目安です（休憩含まず）

**スタート** 新屋公民館→約0.6km＊12分→赤沼家の屋敷林→約1.4km＊28分→耳塚堂→約1.3km＊26分→曽根原家住宅→約0.7km＊14分→諏訪神社→約0.5km＊10分→

**ゴール** 新屋公民館

【合計】約4.5km：1時間30分



※私有地への立入はご遠慮下さい。



(e) 曽根原家住宅

本棟造りの原型をとどめる伝統建築



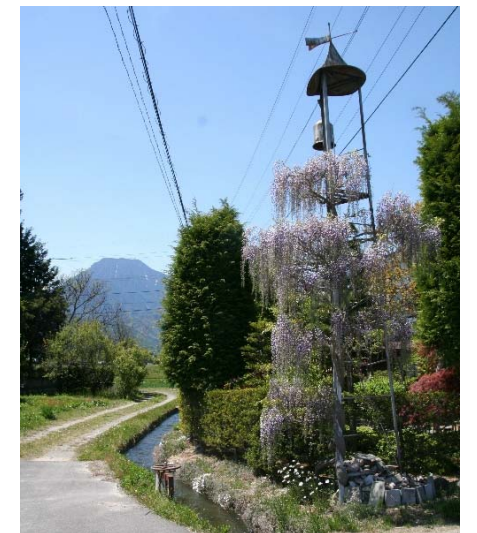
(d) 屋敷林と緑の小路

天蚕農家の歴史と静寂さを感じる道



(a) 赤沼家の屋敷林

白壁の土蔵と屋敷林の調和



(b) 火の見櫓

白フジが絡み怪しくも美しい工作物



(c) 耳塚のお堂と石造文化財

ここは有明一番地

平成26年度 長野県地域発元気づくり支援金活用事業



## ① 新屋公民館

戦後「集会、読書、映写」などをその主要用途として建築され、昭和26年(1951)完成。控え柱のある構造、屋根はトラス(洋小屋組)といった、当時の安曇野ではまだ珍しい建築構造は、少ない材料で軽く、大空間を作るための工夫が現れた結果といえるでしょう。

【新屋公民館：国登録有形文化財】



学校の講堂を彷彿させ、度々ドラマにも登場

## ② 新屋公民館前での石造文化財群

安曇野の石造文化財のなかでもとくに貴重なものが残されています。元治元年(1864)に造立された大黒天碑は安曇野一帯で最大級です。道祖神のうち一体は富田地区より嫁入りしたもので、背面には「帯代九両富田村」「帯代九百両新屋村」と記されています。

【大黒天と道祖神及び石造群：市有形文化財】



公民館前での石仏群

## ③ 赤沼家の屋敷林

二軒の異なる趣きの屋敷が連なり、南側の屋敷は屋根が高く、煙出しの越屋根が上がり、かつて養蚕を営んでいたことが分かります。北側の屋敷に存在する屋敷林はカエデ・イチョウなどの落葉広葉樹が多く、秋には見事な紅葉を目にすることが出来ます。写真の表門は諏訪片倉館の迎賓館にあったものを譲り受けたものです。



紅葉に映える迎賓館の門

## ④ 藤木稲荷の石造文化財群

地域によって守られている藤木稲荷。いまでもお祭りは豊科の玄蕃稲荷の祭典に合わせて行われています。江戸期から明治期にかけて建立された石造仏群があり、うち一体は正徳3年(1713)の四臂(=腕)の青面金剛像です。足元の彫り物は珍しい一猿一鶏です。御嶽山講供養塔は天保14年(1843)建立で毎年7月に祭典が行われます。



青面金剛像の足元に注目

## ⑤ 耳塚のお堂と屋敷林の美しい通り

耳塚のメインストリートには道路を包み込むかのような樹木と大きな屋敷が立ち並び、天蚕農家の歴史を今にとどめる古民家には、今でも天蚕の蝶籠が土蔵の軒下にかけてられています。耳塚の御堂と呼ばれる建物は江戸中期の建築と推定され、当時は村会所等、多用途で使われていたようです。

【耳塚の堂の木造阿弥陀如来坐像：市有形文化財】



天蚕農家の歴史を感じさせる通り

## ⑥ 曽根原家住宅

この地方の伝統建築・本棟造の原型ともいわれ、1600年代半ば～後半頃に建てられたと伝えられています。昭和48年(1973)に国の重要文化財指定を受け、昭和51年(1976)より1年以上の日数をかけて大改修が行われました。傷みの激しい場所を改装し、間取りを古くからの形式に復元しました。(要入館料・冬期休館有)

【曽根原家住宅：国重要文化財】



土間とおえ

## ⑦ 諏訪神社

諏訪大社上社本宮からの勧請で旧村社。慶安3年(1650)創建との由緒があり、ご祭神は建御名方神(たてみなかたのかみ)、当初は諏訪神社とは異なる産土神を拝していたとの説もあります。旧新屋村は諸々の文献から近世になって以降、旧古厩村より分村した新しい集落単位と伝えられております。

【神楽殿：市有形文化財絵馬他:市有形民俗文化財】



拝殿と天明元年(1781)建築の神楽殿

## 世界に冠たる安曇野の天蚕

「繊維のダイヤモンド」「繊維の女王」と、その美しさと希少価値によって高い評価を得ている天蚕糸。もともと全国の山野に自然に生息していた蚕を、人工的に飼育し産業として発展させたのが旧有明村でした。天明年間(1781～88)から始められたといわれる飼育は、明治の中頃には3000haから800万粒／年の繭が生産されました。病害虫に弱く、課題が多くありますが、未来への継承のため努力が続けられています。

